俳諧七部集

中村俊定文庫
文庫 18
685
1

佛語考聚集

景福殿藏
中村侯爵文庫

曙くんとんくの戸あけきわひく
熟田おりるこゆうね渡り舟さいら
くなわゆくは并わりをとてはて也
いとのくなわ重ねわなをる
竹墻かとちるさよふちりわてを
ハまりきを牛毎乞出仕る

本瓜

二月十八日

荷兮

まちくや人ゑぐくハ伊勢まいを
拐ちる中馬 なゞく連 重五
山ゑ乙月一何よ鉸 ちく 雨桐
鎧なゞれ史ゑ 李風
志ゑ風ゑくゆハ函なく 昌圭
くちるゆ中ハ岩ゑくんて 執筆

須ノ寺ニ行ノ帷ヲ脱ク　重五

をゝらくかゝる笛を戴く　荷兮

文王ノ子をとゝ　李凡

雨の手ゝ角ノなさ草　雨桐

肌をとゝ一度ハ背をうく　荷兮

頃城乳をうくゝと晨ゆ　昌圭

青ゝゝ境よ人の紅移ル　雨桐

ワもゝとノ神輿うく里　重五

砂（イサゴ　スナゴ　スナ）

鳥居ゝゝ半道真の砂行く　昌圭

花よ出男（ヲトナ）ノ帝（カド）萬わぐふゝ　李凡

柳ゝ陽ゝゝゝゝ鞠ゝゝ　重五

入ゝ日ゝ蝶いぬぐゝ　荷兮

二

ゝゝゝ麥ゝぬぐゝ家ゝ連（行く）　李凡

ゝ懷ゝ梓（アヅサ）きゝゝ　雨桐

黑髮をたゝゝ　荷兮

いゝゝゝき五位ノ針　昌圭

[illegible]

[illegible]

朗朗豆腐を蒸よう〳〵きけう　昌圭

念仏さゝやきて秋うれしや　雄尺

穂蓼生て蔵を住ゐよ俺ゐて　重五

[illegible]名を掲ゝ名よりまが月　荷兮

傘ゝ田辺付ふなが兩ゝ昏よ　雄尺

[illegible]　白桐

[illegible]

汐瓶ひけを二人して口を　昌圭

在よゝあるゝ局ゝ年ゝて　兩桐

記念ゝゝゝ姫ゝ菅畑　重五

いくゝゝと花と行たいそぐく　昌圭

[illegible]　雄尺

三月廿日四水亭にて

且藁

[illegible]坂や畑の山の八重さくら　野水

[illegible]　荷兮

[illegible]　越人

[illegible]　羽笠

[illegible]　執筆

声

ウ

望月さ（ウヅ三升）を蒙るとしたりし　野水
菓わが垣よりいまだ人くとく　昌菓
表町ゆばりく二人髪剃（カミソラ）し　越人
暁いうし車ゆくとぐ　荷兮
鰐負ふく文津の深よりかり　昌菓
何やらん乳国の声　迦人
弱なわるゆるぐと蛙もうや　羽笠
萩ふたたん百日のくく　野水

軍人の薄を絶て雑の面　越人
月かさ浪よ雲石（ヲモシ）くく　羽笠
古ろもかの根よ乳入鮎　野水
汎をきか春清湯の山　昌菓
二
のもやれ紫の袂伊勢物語　越人
四待のえ代眉の図　荷兮
物先軍の中ハ汁ひきよ　羽笠
名かち栗とぢ上ケ　野水

大年を念佛とあつて惠義酒棚　昌蘗
ちはやぶる無敵よりの陽や　越人
ひろまりの茶入とある掛花入　荷兮
元禄七廿日ちやうや変れ粉　羽笠
一乘寺宿を馬上寺あれや　四水
こゝを魂まつるさらきの月　昌蘗
陽炎（ケロウ）のうしのつるまゝ帰れ　越人
昌雨油ひれ哥いそゝく　荷兮

田をかくむしかはれ（ウ）　羽笠
力の命をたぶり中の　四水
連（ザヤナミ）やこゝ井の東れ絶ふ　昌蘗
るびくのこゑ雪のふく　越人
入つきゝ廿九日の月さむき　荷兮
元のにしゝりの氷ゝ　羽笠

三月十六日　且藁ノ田家ヨ

うゑまろく　四水

蛙ノこゑまつゆきさ森見れ

額よりなかれ雨ノうち　其素

蕨烹ル岩末ノ臭ル宿ノ内　逸人

まゞくゝ人をうゝか馬ノよ　荷兮

ちくゝふ渡ノ舟ノ月新ノ　冬文

芋ノ捷を拾ノ傘ノ端　執筆

ウ

磯ぎよ施餓鬼の僧の集りく　且藁

○岩のひとり蔵ゆる里　四水

雨の日も瓶焼やん煙　荷兮

ひぐらきるも旅の一ほと　越人

尋ぬる物えい住まば捜ずて　四水

解てをそうん枝むる私　冬文

今宵い更ぬてやうを

月十九日　荷兮室にて

荷兮

咲ぬ日を菊よりおそき露ぞ　越人

○秋の和ぬるうるの　順　且藁

初しぐれ色ぬげる火をぬ　冬文

○別の月ぬなるわるを　荷兮

○鉢形花四の宮ぬ唐輪して　且藁

ゆく通のぬ　四水

二

永き日やと幻とけるこ　荷兮

貧のぬ　年ぬる五月の中　越人

音

岩茸

紹鷗り飄ゝうして来ハ行　四水

連哥入もしてあるゝ　なつそ

瀧壺ゝ紫押まぎて音こそ　趙人

岩苔ゝの入竜よさぎゝも　具茶

むさゝりゝ帛ゝ　なつそ

蓬二枚もむろき家　趙人

朝毎の露あゝれに変化ん　具茶

春ゝを送ゝかきねゝ入月　四水

[illegible]なき嬢の自毎ゝ綱入ゝ　音写

ゝ羽の凍ゝ　なつそ

ウ　ゝゝ　四水

ゝゝ一切章の君ゝ　雪

ゝゝ入ゝ水波ゝ立ゝ　趙人

餅を食はゝいゝ君ゝ代　具茶

山ゝ花所のゝ後遊ゝ　なつそ

ゝゝ　荷分

追加

三月十九日舟泉亭　越人

山ぶかあぢふる処のそしでかな　舟泉

蝶よりもしろき昼寝　聽雪

きさらぎや餅酒をくき雪あり　桑鼎

行幸乃ゝろよ洗ふ玉器　荷兮

翔日を鷹ゝ鍛冶乃いとゝく

月なきを乃ゝ乃ゝもあを　執筆

昌陸

春

昌陸の松たゝ御代のまに　利重

元日の朱雀の詩篇足伸し　重五

初春の遠里牛れぬる日か　昌圭

うぐひすの海を渡りて麥畑　柵桐

門を松苔茶園の雪さむし　舟泉

鯉の音水の入間くれ白し　羽笠

舟〳〵の小松を雪れぬる　且臺

頭脳

○暖入人頭　牡丹　杜國
○綿ゝ元日星の照りうれ　犀夕
○星ゝ　かたまれる冬の雲　春霞
○ゝて小紅角ゝ牛の夢　聽雪
朝日二分柳の動く白ひうれ　青兮
ゝ四ゝ人まひくき雲あり　同
○芹摘て流なき墨ふ　且素
のゝ人の行へ

みゝ人ゝ白梅いやしゝ　越人
○古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉
傘張の晩り胡蝶の夢　重五
山や花燈根の酒　亀洞
○花ゝ見ゝ直ゝ　越人

春野吟

○足跡ゝ桜を曲る菫　杜國
○禁寺かゝ　光風

榎はまて探乃遅きあがれ　荷兮

餞別

藤乃花をうしろに別れ　越人

山畑乃茶つをうしろ今ろれ　重五

蚊ひりよ森は長夜半ぞ　同

まつ乃風

夏

なつまつりそ乃山鳥尾ハ長し　九白

郭公さ油乃焼くあるあ夜ハ　李凡

かつこう板屋の背戸乃一星　像　越人

うもるさをかれ柳の下乃　杜國

乃竹乃うしろたる蓮　亀洞

傘をそまで蛍こ乃東ハ　舟泉

武蔵坊をとゝ

そじかもゆくゆくの玄川　商露

夕夜乃東を望ゆくゆく

聯微

馬くまなくふるの月　聽雲

老聯日知足之足常一足

○子ふる雨雜水わつて芝蘭成武　越人

夢一丈の微雨こほりて鳴蚊帳　柳雨

はくまゆをなつむる中に昏れ　虚文

萱草一ハ遠き花の色　荷今

蓮池のよるとつてはなれん　仝

曉の夏佳夢成り遲き帆　昌圭

夏川の書よ宿る山書路哉　重五

辭喻品三界無安猶如火宅

といふ句を

六月の汗ぬぐひ居る臺哉　越人

秋

宵戸打細ひそみくるを　且藁

貧家の虫

玉まつ柱むしよりくれん　越人

「きさらぎ一番入る夜哉　雨桐

きぬ〻人をやとる月哉　芭蕉

山寺に来けるうと月夜哉　越人

瓦ぶき家も雨ふる秋の月　野水

八鳥をかまへる屋敷の塗さて

具足ぬく頼ノ〻臣月夜毎　全

待恋

きぬ屋を夜柔ふんせんせん　荷兮

琴柱（ことじ）

秋ひとり琴柱（ことじ）ぶつて寝る夜哉　荷兮

別れ白ちとせ一ぱいよんなり　舟泉

冬

馬ぬすと牛ハクタ有村さえ　杜國

芭蕉家を家ゝ伝ふく

雪ふるよ藪の鶴よ牧屋を見を

雪のうち舞ノ〻のよ舞ふん　大垣住　知行　昌碧

馬をさへなづまぬ雪のあけぼの　芭蕉

行燈の煤とぶ寒さ雪ぐもり　越人

芭蕉翁をおもひてよめる

このうち氷水もとるあるじかな　牡園

隱士をかりうかぬ宿をもとめて

わすれきぬ笠ぬぎかけの竜　荷兮

貞享三丙子年仲秋下浣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

出茶屋にて

白[illegible]竹[illegible]作る　芭蕉

[illegible]　茶　老　野水

有明の[illegible]酒屋[illegible]　荷兮

[illegible]　重五

朝鮮の[illegible]　杜國

日[illegible]仁[illegible]茶を刈　正平

赤馬

わのくれを惜るとて世のくるるを歎く暁の
髪そやもとゆふ分身のうと　芭蕉
いつわのつくと乳をたもとにて　杜國
きえんめくとふてすくとなく　荷兮
新法（カゲボウ）のあのつまもしく火を繰く　芭蕉
あるしそひんくきえて虚家（カライエ）　杜國
四中行るこすんの御蔭るころ　荷兮
寒くそ引人いちんこの形水

半このかをを横くなるもる月雨そ　杜國
とそわさうこを町こもち乗る　芭蕉
二の尾くを濡れ出のさうこく　野水
懐をひこくとのり鼻こも　芭蕉
のりあ蘭東新おもこのる　芭蕉
いまそ恨さん夫家こもの声　荷兮
ぬすんの紀念の松吹おく　芭蕉
出こく宗祇ほ名を付し水　杜國

笠ぬ冠て妻戸に小河面 荷弓
みそのくれなゐの唐菅 時雨
きらくと降らす人の骨うの 村國

烏賊（イカ）

烏賊はちくれなの国北ちくるる 重文

謎（イナゾ）

あくれなゐ謎をとらー 郭公 時雨
秋水一斗をもつて夜を 道意

巾（キンノフクサ）

白玉の雪白の坊に自然と 重文
巾くる木槿なるむ琵琶 打 荷弓

歎

うしの紅をぬる北夕ぐれ 道意
箕くー歎の鼻なる 雪 村雨
わのいのるとあなうる星 荷弓
うまをにぬれたる 時雨
綾なくく居場くる 時雨
廊下を藤のけつるや 重文

おもへとも壮年いまたころもまた振袖　埜水

ちり雪をはたしと待てうつる　杜國

霜りまさとりたる蕣の食　杜國

咲菊にてさつめる蝶の羽わかく　芭蕉

うつろふ花を秋とてまたるさふか　荷兮

麻呂の月袖に鞨鼓をならすらん　重五

桃花をたをる貞徳の富　正平

面こぼる浮まの田螺あるきて　杜國

奥のきちよよ飯只なまくにがく　埜水

床ふるく瀧越て住なる男　荷兮

猿さるけり花限このなかし　たかし

口おしと瘤をちぎる力わざ　野水

明日はそうらふ筆にゑびす違あらん　冬文

小三太に盃とらすひとつ哉　芭蕉

月無く連の花牡丹ぬす人　杜國

嫁（ヨメリ）

帶

魂あそぶのかれやおれ碧落て　冬文

ちりしらみ地藏切町　荷兮

物うらし秋色哉嫁のにのらく　杜國

しのぶ路にちれる花その八ゆ☐水　野水

櫛たてに綿をゆる袮やせめのよ　冬文

うらなき娘や家の端にあし筆　芭蕉

寝ごのく稍なれ蓬さらし　野水

三線かくん不破のせきと人　冬文

[illegible]すゝ[illegible]落て行[illegible]碁[illegible]

○[illegible]

七十　杜國

[illegible]

[illegible]の傘（カサ）[illegible]

蓮[illegible]

[illegible]

月[illegible]

○[illegible]

○秋[illegible]虚（カラ）[illegible]

[illegible]の實[illegible]

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

芭蕉

杜國

[illegible]

つえ衣ぬく事僅く　中歩

霽（アメハル、セイ）

ぬく葉の雫月もわ葉す霽のか　杜國

こもれる蛍ひかりのはつる　重五

歯原の葉を初狩人ぬ矢ぐ頃　野水

仏の門をはらあらたまる　芭蕉

馬糞掻（カク）ふるた風のすゝ　荷兮

茶花陽者ゐむ時人の菴（タンオ）の英　正平

[illegible]

燈籠 [illegible] 杜國

つゆ秋のすゆふかゝ [illegible] 芭蕉

蕎麥さく青し 流噴(シカラキ)系の [illegible] 野水

名月夜双六うつの [illegible] 杜國

[illegible] 芭蕉買(カフ) [illegible] 荷

[illegible] 雜を [illegible] 野水

[illegible] 芭蕉

[illegible]

二豆

縣

[illegible] 行 荷

佛喰する奥解(ホト) [illegible] 芭蕉

縣(ゲン)する [illegible] 芭蕉

形(ゲン) 菫 畠六 [illegible]

[illegible] 芭蕉

眞黃の馬 [illegible] 野水

おのゝ [illegible] 杜國

[illegible] 荷

貞(シヽトル) [illegible]

捨しゐを宗祐長(メケ)さのんつる　時水

晦日(ミソカ)をさむく力賣る年　宇文

ゆとの紅葉ゐ國の笠免つりま　荷弓

襟しゐ言雄の片他をとく　大素

あるゐ人と移ゐ稲く春中ゐ　玉文

芥子のゐ人くゐとゐ禅　杜玉

三ヶ月の宋ゐて晴く鏡の鉢　蕉

蛙瀧のゐゐく琴ゐくと　者妙

京ゐ月(ゐ)なゆゐてゐを放る　杜國

鉢ゐ宋会佛藪ゐ色ゐつる　芳弓

ゐすゐ行燈ゐ仁起ゐく　野水

なゐゐ川ゐ夜ゐの笠引　亦文

天ゐ花たゐ西ゐ花ゐ　芳弓

ゐゐ宋ゐ宋ゐ松ゐく文　

蘇（キヨウク）

なを波はすくなし　火鉢哉

はつ〳〵ふるはしら花

炭賣もものすさまじ黒の兎　重五

ひとり居の鞍馬を鏡　磨　寒　荷兮

花蘇馬骨の雪ふる吹の山　杜國

鶴ゆるる中も月すゝ哉　野水

この折の迎秋の日　瓶に酒　芭蕉

筑紫のさなを市く振り　羽笠

徽（キ）（ヨイツクシ）

（アトノラ）
（ナハ命ハキ）

○喰義川や胡麿千代家の徽を　荷兮
○ふとゝの舞なるかのすゝろ　亦之
○ねのふと布搗哥さわらいく　野水
○うゝふをゝちゝ銭る三平（ヘル カホ）　杜國
○拾ちゝく有るゝ鷺ゝ離も　羽笠
○火ゝの火燈ふゝ人をゝ弟　笑意
○門守の箱に寄ふゝ寝る　亦又
○血刀ゝく次身の傍ゝ　荷兮

徽（ケン）
歎（タン）

（サイシヤ）
（カンサシ）
釵

○夢ゝて本御の銭七ゝ　杜國
○ふゝ紙豆ゝ　野水
○ゝゝく泣猫の徽とゝ　笑意
○僧ゝのゝ次歎冬ゝ　羽笠
○白慈ゝ有ゝ水ゝ　荷兮
○宣旨ゝく釵を銭　亦又
○八十年を三月ゝる童母ゝて　野水
○なゝぐゝそゝる七夕のゝ　杜國

西南く桂林の一夢さめて　羽笠

蘭のあふりて　卜木うつ音　芭蕉

鶏声乾て賢の如りんくうる　重文

釣瓶に栗成のふるの孔　荷兮

そやわあく搖るかさる正月　杜國

清く咲る而る無為さん　野水

寅乃りさん具を飯治起く　芭蕉

ことかりつよ　あ　京の地（ツチ）　羽笠

けのさ——て泥さちあ人の像　荷兮

泥くさ沼のさ水芹の根　重文

鄰すあのまよ　やさかこまわやさん

物夜の下て　鑓ふち　風蕉

如ちるなくの簾ちやく　羽笠

稲まあ夢と青うむる面　杜國

田家眺望

雲月や鸛（カウ）の行（ツク）々あらひみて　荷兮

名残り惜しくなりぬる　芭蕉

椹檜山丸の侍をあれ茅屋　重五

しの茶ぞるしれ塩こもれつ　杜國

青竜の具足の月のうすく　羽笠

酌とる童（ワラハ）茶切り　埜水

秋のくれ猿おどしの庫裏ぬれて　芭蕉

淋しくもれる音聞ゆる寺　荷兮

麻ばかりて椿ばかりの落る　音　杜國

茶ばくち糸遊ながしもる風の秀　市良

雉追に烏帽子ぬれ女又三　十　野水

庭下に麦蒔ちらしの落衣　羽笠

ぬりかつら山橘ちらしたる　荷兮

麻うゑとはつ奇の集　あむ　芭蕉

江をたく獨茶菴と世なれ捨　市良

雨月出る所あるかの影　杜國

雪ふる夜笠ぬぎ掛て　羽笠

籠輿ゆる波木瓜の山あれ　野水

骨ばかりくろくぬれる雨の　芭蕉

乞食落義をとゝふ志の先　荷兮

泥のくに屋ぬ引鯉を拾ひ捨　杜國

所幸に進むみちもつ　市良

[illegible]

菅屋[illegible]に炭團[illegible]　白羽屋

[illegible]小坊主[illegible]　[illegible]

[illegible]蓮[illegible]　[illegible]

[illegible]月の[illegible]　[illegible]

[illegible]風や[illegible]　杜國

釣棚[illegible]屋根の[illegible]庭　[illegible]

豆腐[illegible]て毎[illegible]喪[illegible]　八　[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]

伏[illegible]木幡の[illegible]　[illegible]

[illegible]男猫[illegible]捨[illegible]　杜國

[illegible]　[illegible]

[illegible]聖[illegible]　[illegible]

山茶花白[illegible]笠[illegible]　[illegible]

追加

○ひのくれんとて蕉雨しとしとと叢　白雪
○橋少しあるのたちの　松濤
○さくさ刈下ものに紫をちやたて　宗因
○檜笠ふく家なれ屋のとまあ　杜國
○郭公　哈かりし月も　海　芭蕉
○ひらりと橋をとのくは岐阜山　楚水

江南春　珠碩家ひさこを送りてこれに
是を潞酒をあり　ものを酒を命ずむ
あるは或は大樽を造りて江湖をわた
れいるの人面よりも異なり五湖
なん恵みして用ること河ち
につくおをはるとあるを蟲をあや
めてけちちる　瑞る醒てこるを
日月陽秋さらてこのにして雪あけ

藻

藻ニ同シ

和乃商ちう郭公も、うたたねの夢
おもを吾新人とも乃ゑんをあらまして皆風雅
乃藻思をいつるもたちまち是いつれ先
やこころ乃ゆ〜て乾坤の外なることを出て
世のことを云く無日は内よりをとうへ

元禄三六月　越智　越人

花見　翁

○木乃ゑをゆくよ汁も鶯を搖の郷
西日乃とうにたちさる気なわ　珎碩
嫁人乃風かさ切表芸るく　曲水
たちさも習さぬ生力ち鞘（ヒキダ）　翁
○月清く假ち内裏の司石　碩
○粉白つくる松うちわさ　水

鞍置る三歳駒よ秋の末て　翁

○名のみさまく〜降る雨　碩

八辺に流れの涌湯はなを雪　水

中も埋れぬ山伏　翁

行かの末を唯一立えしらり　碩

かなたを高ほのりて　水

掛ものの喰ふ人　翁

月の出の新たとを露　碩

秋風や新を〜る波の音　水

鳴ゆく〜うやの松　翁

○新墓花乃盛は一角田　碩

○巡礼死ぬるの、の墓乃ふ　水

何のなる宿の現をあたる　翁

又出かの山　なこさ　碩

羅（ウスモノ）（ツラナル）（アミ）四羅〜り我いとそれかち　水

○熊野をみ〜ぬと泣ふ　翁

ヲ東ヲ紀ヲ雪の頃ヲ　碩
酒でとけたる氷あり　水
み六乃月をのてくまて　翁
假ハ掛佛よむ合仏　碩
中くヲ土間ヲ春ヲ　水
一面名ヲ星ヲ　翁
炉ヲいる湯乃わを　碩
身ヲ　水

花落あるを　翁
唯四方なる草庵　碩
一貫ハ銭ヲ　水
醫者乃ヲを飲ぬ　翁
花候ろう黄野あるを　水
蛇ヲ　碩

翁　十二
珎碩　十二

いろくの名をむつらしやまちのみな
ゝれて懐かしう差はさしあぬる　翁
蝙蝠の のゝうまつるをさし出て　路通
○かるかゝ竜の上をゝめる姿　越人　今
宗蘇の実をゝ手に入て今の世　碩
親子 あゝしいとく月を抱ふ　今

珠碩

秋のくれ宮もりをこの色ぞひさしき　通
こぼれてもれていつくしみ　仝
うつす香の雅藏を貴ひさしき　碩
小六ふしぎ市かつかつ　仝
鯲の名ちいさく見ゆる川の端　通
金仏とてむかしのこと　仝
うらら花茶もうれをまいる　碩
立野里の夫ゆかしされ　仝

バウ　姫　ババ
アタマル

嫁娶雅を人の姫つれて　通
花をあくびよ月の嫁　仝
さかのさす海のをを和日なり　碩
生鯛あくつる浦ちさ小　仝
し村のこ度をみ醫ちかなるうわ　荷兮
ぬ乃ちんをけいをものまちとも　越
かちくさる無紙退庵も出る色　兮
まくさ法もすり酒乃ち先さん　人

なゝつゆやる秋乃ゆふぐれひろき　兮
蕎麦きゝ白ゝり　山ゐの胴中　人
うゐんこん星乃ちりしの月歌　子
ちゝゝゝ　つゝのこゝ裸武　人
ゆつゝゝゝゆゝゆゝ　享之ゝゝ　兮
文瑞の初ゝゝゝ　盤持の愚癡　人
ゐし仏城みゝゝ　ひゝゝ味噌　兮
仏ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　人

特長藤

意

志乃ゝ萩の花ゝうゐゝて　兮
ゝゝゝゝゝゝ　顔をゝゝゝ　今
汗の香をかゝゝく衣をゝゝ　人
ゝゝゝゝ面ゝゝ　今
ゝ花ゝゝ又百人ゝ服ゝ　兮
ゝゝ嬢ゝゝ花ゝ　今

孫子九

義一

俳諧八
芭蕉十
越人八

城下　野徑

鉄炮乃遠音に暮る外月哉
水の小麦乃痩てくらし　里東
雨風ゝまたの小貝拾ひけり　泥土
なでぬる一川　鮒（モラ）ひろ　乙州
碁いさゝひこ人たゝるゝ　怒誰
秋の黄蕎麦　弥碩

○雪降て綱まで松をそなへて　筆
同の中松をくゝり足をかちあるく　野徑
なかもと川原の石をくゝりつけ　里東
新乃松のしをつきやゝ　泥土
馬より乗をゝりやすて　乙州
一里とはなるも　山乃下苔　怒誰
足ゝ行きて山屋に延命寺を　泥土
拾れ老ハ涙雨ゆゝしかれと　里東

○雪舟よ雲紙の拙筆ゝ宮さた　野徑
○寺歩につゝ丁百ゝ銭　乙州
月花よ宮をよくるゝ　珍碩
黄金乃塩ゝ　怒誰
くゝ紅葉ゝ　里東
中気遣　珍碩
乃みたゝ　乙州
○古さゝちのくる　野徑

糊（ヒ）

糊（ヒ）糊（ヒ）

○時くるを百姓共も烏帽子を
　　怒誰
○瓜瓜を見るゝ借御乃輪
　　泥土
○多和かない紙幽霊共伝やん
　　珠碩
○連も力を皆こゝ仕なり
　　里東
○かゝ風乃大悪寺縄を修繕
　　野徑
○雲乃こゝるに用叶へてさ
　　乙州
○糊剛さ蕎麦ちゝさぎちゝ
　　泥土
○多迎ちゝ有る菓食喰もす
　　怒誰

○看経乃嗜（ヒ）ゝ時こゝる嘆気哉
　　里東
○四十ゝ老ゝちゝ際
　　珠碩
○繁ゝに枕乃夜を寝ゝて
　　乙州
○醉を細ゝよあゝて吹ゝ
　　野徑
○牧村乃花ハゝ蒙ゝ面ゝ
　　怒誰
○田ゝ片隅迎苗乃やゝ
　　泥土

野徑　六
里東　六

泥土　六
乙州　六
怒誰　六
孫碩　五
筆　一

雜

乙州

○龜乃甲高くして時に鳴き長
○唯半一番長く風乃ふく者　孫碩
○百姓乃米稗仕事人々のさて　呈示
○小竹ゆるかゝるの縄　探志
○獨寝くゝ奥乃間ひろき旅の夜　昌房
○蜘蛛　高てゝゆるむ物　正秀

秋萩乃庵笠ちるを流
風に此加減乃さゝの成り
當乃ゆきを敷うて帰郷
雪乃やうなるかますこの塵
初花を離の巣籠に居なるへ
人のそゝを高ちあらまほしる
庭篠乃香に秋そとあひ笛の
寂るに起て侍ひ鳥啼

及肩
野径
二嘯
乙州
孫孤
里東
探志
昌房

秋入乃巾巻乃ゆ
まを上京をゆくやゝ
蓋を盍島羽の野屋
雀を蒙

正秀
及肩
野径
二嘯
乙州
孫碩
里東
探志

籠乃ぢく先
うすはるるはかんみるとこあ
沖ひしまるゝ声のもゝのあれ
深て豪本掃除の祝すゝを
撰なまをしれてゝをゝあけの

晴かるる茶碗乃下をとる分　昌房
猶る を呼る　正秀
いとるる徒一篇に横紙　及肩
ゆる鯉棚乃秋　野徑
はくくぬ切紙の張る風吹　二晴
をか乃序ものの　乙州
冷酒よ味のつくこと　孫碩
蔡柳　ちゝ涼　よ　里東

月をぬる沢乃のうとぬるまあけ　探志
こゝをかゝこゝさ　こゝ上侍　昌房
をこゝ乃をこ　獄紙ちて　編にけ　正秀
縄を　る　寺　上　及肩
花乃比員の日　ぐ　野徑
さゝゝ　獅　の　二晴

乙州　四
孫碩　仝

里東　四
探志　仝
昌房　仝
正秀　仝
及肩　仝
野徑　仝
二嘯　仝

田野　正秀

鶯道や苗代時乃角大師

明るきや雲も野辺乃氣乃顔　孫碩

蛙ふとのわやそれ鳴くまこの元　仝

かまくらに乃文字　秀

月朝よ利休乃家を鼻くの蛍　仝

度〳〵芽をそろそろ出るの　碩

虫も皆つれしく鳴やらむ　秀
杵足しの木履ならぬる　碩
誓文を百も負て書る起請ニ　秀
なつかしく役乃侍　碩
須广ハよし拙ふ自由なる霊亦　秀
抓乃跡ある月かまゝにやる　碩
月氷る師走の夜空の銀河　秀
無理ニ押る脈も進まれ　碩

いとめかして大腳指を出されて　秀
獨ある子も矮鶏(チャボ)を替られ　碩
江戸酒を花咲頃に遊ひつゝ　秀
あいの山禅まつ乃入逢　仝
雲雀啼(ナリ)里を厩(マヤ)裏(ココ)ハかま家道　碩
火を吹てある禅門の祖父　秀
本堂ハまだ荒壁乃つゝら絶　碩
羅綾破て彼ありて縫ひぬ　秀

歯を痛人の為を作る中に　碩
ふるさとをむすべこそ渡らん　秀
藤垣の穿る紙鳶を捻をさ　碩
口上果ぬいとさすの時宜　秀
手のやとりする小判なる業務　碩
秋入初る　肥後ちり　隈本　秀
幾日経も経て用尽る後を新　碩
寸布ひとり　あをやぎ　秀

沈山は元めくやを吹らしかく　碩
呼あるもの猫を呼ぶ　秀
名紙は小人哥乃雨あがり　碩
やしほの楓木の芽蘭立　秀
蕨花は雪踏枕つる寄あり　碩
水鶏ゝゝる場にをゆるこの強　秀

正秀　十九
跡碩　十七